

本願寺の年中行事

京都の本願寺では年間を通して様々な行事が行われています。

各行事については本山ホームページや、寺院に掲載がありますのでご確認ください。

それらの行事の中でも数年から数十年に一度

「大法要」というものがあり、来年二〇二三

(令和五)年には親鸞聖人御誕生八五〇年と立教開宗八〇〇年の慶讃法要が行われます。

当誌でも法要に合わせて本山見取り図などを出版する予定です、奮ってご参拝下さい。



慶讃法要の日程を知らせる高札(本願寺・御影堂門横)

ご消息全文

蠟燭講開講一四〇周年を記念して御門主よりご消息(お手紙)が發布されました。コロナ禍によりお披露目が困難であるため、ここに全文を掲載いたします。

宗祖親鸞聖人は、煩惱具足の凡夫が阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、浄土に往生して仏となり、迷いの世に還って人々を救うという道をお示しくされました。

私たちは、釈尊が明らかにされた諸行無常や諸法無我、縁起というこの世界のありのままの真実に気づくことができず、自らの欲望の赴くままに自己中心の心で物事を捉え、自分の思い通りにはならないことで悩み苦しみ、また他人(ひと)と争ったりしています。

このように我執、我欲という煩惱から一歩たりとも自由になれない私たちを阿弥陀如来は哀れみ悲しまれ、そのままの姿で救うというご本願を建てられ、その願いのままにはたらかせてくださっています。この願いが南無阿弥陀仏のお名号となって私に至り届き、

私の信心となり、私の称名念仏となつていくのです。

浄土真宗のみ教えを依りどころとする私たちは、お念仏申す人生の中で常にわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに御恩報謝の生活を送らせていただくのであり、その中で他人(ひと)の喜びや悲しみを

自らの喜びや悲しみとするなど、如来のお心にかなう生き方を志すような人間に育てられるのです。全国各地の講社の皆様が今日まで、愛山護法の思いから本願寺を支えてこられましたことは、まことに尊く、有り難いことでもあります。早良組蠟燭講は一八七八(明治十二年)、本願寺第二十一代宗主明如上人の時に設立された百四十年余の歴史を有する講社であり、その名称は日本の

蠟燭づくりの濫觴(らんしょう)の地とも称される筑前地方において、本願寺に蠟燭をお供えするという講社活動に由来するものであります。以来、今日までお念仏のみ教えを喜ぶ講員と早良組各寺院住職、僧侶の皆様が共に支え合い、確かな歩みを進めていただいております。早良組蠟燭講はこれまでも、月例法座等を中心に、長くご法義相続、本山護持に努めてこられました、核

はじめに
一一七三(承安三年)五月二十一日、親鸞聖人は京都の日野の里で誕生されました。
九歳の春に慈円和尚のもとで出家・得度をされ、比叡山で二十年間、「生死いづべき道」を求めて厳しい学問と修業に励まれました。
しかし親鸞聖人は二十九歳のとき、比叡山では悟りに至るみちを見出すことができなかつたことから、ついに山を下り京都の六角堂に百日間の参籠(さんろう)をされました。尊敬する聖徳太子に今後の歩む道を仰ぐためでありました。九十五日目に救世観音から夢告を得られ、本願念仏の教えを説かれていた法然聖人のもとへ訪ねられ、本願を信じ念仏する身とな

本願寺

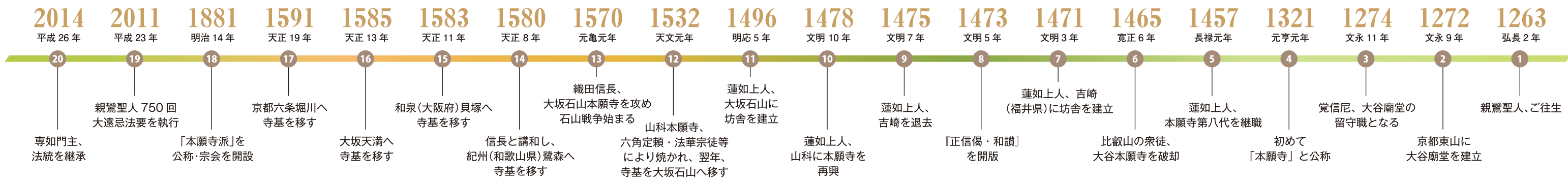
歴史散歩

組より
早良だより



一七〇七(承元元年)、旧仏教教団から激しい非難が出され、親鸞聖人は越後(新潟県)にご流罪とられました。これを機に愚禿親鸞と名のられ、非僧非俗の立場をとられました。その後、越後から関東に赴かれ、本願念仏の喜びを伝え多くの念仏者を育てられました。
六十三歳のころ、関東二十年の教化を終えられて京都に帰られました。『教行信証』の完成のためともいわれ晩年まで添削されるとともに「和讃」など数多くの書物を著されました。





主な出来事

親鸞聖人ご往生

一二六三(弘長二)年一月十六日、九十歳の高齢を迎えた親鸞聖人は、十一月の下旬より病床につかれ、二十八日に善法院において往生の素懐を遂げられたといわれています。
後に、覚如上人によって「宗祖」と定められました。

大谷廟堂建立

聖人の滅後十年目に当たる一二七二年の冬、聖人の末娘である覚信尼さまが諸国の門弟の協力を得て、ご遺骨を吉水の北辺(現在の知恩院山門北側の「崇泰院」付近)に改葬し、お堂を建てご影像を安置されました。この廟堂を守るため「留守職」という管理者を置いたことが本願寺の基礎となりました。

また、この廟堂は「大谷影堂」とも呼ばれ、後に「大谷本願寺」となり、第八代蓮如上人時代、一四六五(寛正

しかし、蓮如上人の教化は比叡山を刺激し、一四六五(寛正六)年上人五十一歳の時、大谷本願寺は比叡山衆徒によって破却されました。難を避けられて近江を転々とされた上人は、親鸞聖人像を大津の近松坊舎に安置して、一四七一(文明三)年に越前(福井県)吉崎に赴かれました。吉崎では盛んに「御文章」や墨書の名号を授与し、一四七三(文明五)年には「正信偈・和讃」を開版し、朝夕のお勤めに制定されました。

上人の説かれる平等の教えは、古い支配体制からの解放を求める声となり、門徒たちはついに武装して一揆を起すに至りました。

一四七五(文明七)年、上人は争いを鎮めようと吉崎を退去され、河内(大阪府)出口を中心に近畿を教化。一四七八(文明一〇)年には京都山科に赴き本願寺の造営に着手し、十二年に念願の御影堂の再建を果たされ、ついで阿弥陀堂などの諸堂を整えられました。上人の教化によって、本願寺の教線は北海道から九州に至る

六)年の「寛正の法難」まで、およそ二百年間、諸国の門弟や同行によって護持されてきました。

以後、第十二代准如宗主時代の一六〇三(慶長八)年、徳川幕府の政策によって五条坂の現在地に移転し、この地を「大谷」と呼ぶようになりました。

本願寺の成立

一三二二(元亨元)年、覚如上人が寺院化を試み、「本願寺」と号し成立します。これより後は、移転時に「御真影」を安置している寺を「本願寺」と呼称するようになります。

この「本願寺」の寺号は、親鸞聖人の廟堂に対して亀山天皇より下賜された「久遠実成阿弥陀本願寺」が由来であるとされています。

三代伝持の血脈

大谷廟堂の留守職は、覚信尼さまの後に覚恵上人、その次に孫の覚如上人が第三代に就任しました。覚如上人は三代伝持の血脈を明

全国に広まり多くの人に慕われましたが、一四九九(明応八)年八十五歳で山科本願寺にて往生されました。

この後、山科本願寺は次第に発展しましたが、一五三二(天文元)年六角定頼や日蓮衆徒によって焼き払われました。そこで蓮如上人が創建された大坂石山御坊に寺基を移し、両堂など寺内町を整備して発展の一途をたどりしました。

東西分裂

その後、天下統一を目指す織田信長が現れ、大きな社会勢力となっていた本願寺の勢力がその障害となったので、ついに一五七〇(元龜元)年両者の間に戦端が開かれました。本願寺は、雑賀衆をはじめとする門徒衆とともに以来十一年にわたる、いわゆる石山戦争を戦い抜きましたが、各地の一揆も破れたため、仏法存続を旨として一五八〇(天正八)年信長と和議を結びました。第十一代顕如上人は、大坂石山本願寺を退去して紀伊(和歌山)鷲森に移

らかにして本願寺を中心に門弟の集結を図りました。三代伝持の血脈とは、浄土真宗の教えは、法然聖人から親鸞聖人へ、そして親鸞聖人の孫の如信上人へと伝えられたのであって、覚如上人はその如信上人から教えを相伝したのであるから、法門の上からも留守職の上からも、親鸞聖人を正しく継承するのは覚如上人であることを明らかにしたものであります。

蓮如上人

室町時代、第八代蓮如上人は、一四五七(長祿元)年四十三歳の時、法灯を父の存如上人から継承すると、親鸞聖人の御同朋・御同行の精神にのっとり平座で仏法を談合され、聖人の教えをだれにでも分かるようにやさしく説かれました。また本尊を統一したり、「御文章」を著したりして積極的な伝道を展開されたので、教えは急速に近江をはじめとする近畿地方や東海、北陸にひろまり、本願寺の興隆をみるようになりました。

られ、さらに和泉(大阪府)貝塚の願泉寺を経て、豊臣秀吉の寺地寄進を受けて大坂天満へと移られました。

一五九一(天正一九)年秀吉の京都市街経営計画にもとづいて本願寺は再び京都に帰ることとなり、顕如上人は六条堀川の現在地を選び、ここに寺基を移すことに決められました。阿弥陀堂・御影堂の両堂が完成した一五九二(文祿元)年、上人は積年の疲労で倒れられ、五十歳で往生されました。長男・教如上人が跡を継がれましたが、三男の准如上人にあてた讓状があったので、教如上人は隠退して裏方と呼ばれました。これには大坂本願寺の退去に際して、講和を受けられた顕如上人の退去派と信長との徹底抗戦をとらえた教如上人の籠城派との対立が背景にありました。その後、教如上人は徳川家康に接近し、一六〇二(慶長七)年家康から烏丸七条に寺地を寄進され、翌年ここに御堂を建立しました。これが大谷派本願寺の起源で、この時から本願寺が西と東に分立したのであります。



17 京都六条堀川へ寺基を移す(本願寺)



11 蓮如上人御往生之地



10 山科本願寺跡(京都市山科区西野山階町)



10 山科に本願寺を再興(山科別院)



3 初代留守職・覚信尼公(大谷本廟)



2 大谷廟堂建立(大谷本廟)